

日本周辺高度回遊性魚類資源対策調査

高坂 祐樹

(まぐろ類)

はじめに

クロマグロをはじめとする高度回遊性魚類は、日本の漁業上重要な魚類であるにもかかわらず、その生態は他の魚類に比べ不明な点が多い。その原因の最たるものとして回遊の時期・経路などがあげられるが、回遊する範囲が広いため県単位の調査で把握することは困難である。本調査は、水産庁が定めた統一された手法を用い、県内におけるまぐろ類の生態を把握するための基礎資料を収集するものである。

調査方法

県内のクロマグロ主要水揚げ港7港(図1)を調査対象地区とした。八戸地区をのぞく6地区では、市場伝票から水揚げされた年月日、漁法、銘柄、製品形態、体重を1尾ごとに調査した。八戸地区は集計された水揚げデータからまぐろ類のデータを抽出し資料とした。1尾ごとに記載されていないデータは、水揚量を銘柄の平均または尾数で除算したものを推定体重として利用した。

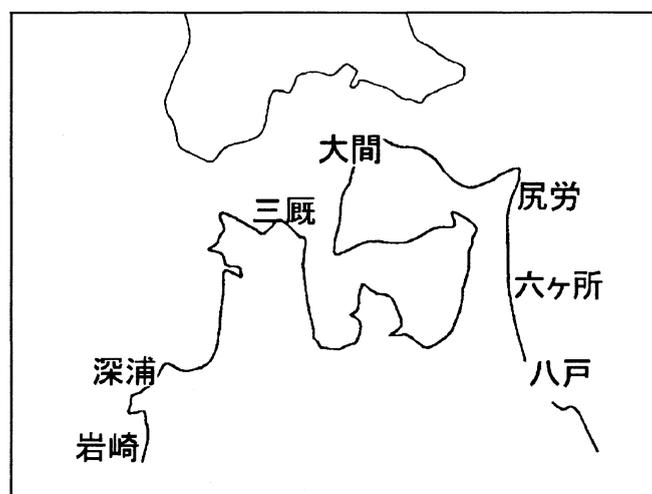


図1 調査対象地区

調査結果

1997年の調査対象地区7地区におけるクロマグロの水揚量は141トンで、前年の109トンに対し30%の増加となった。各地区別の1997年の水揚量は、六ヶ所地区2.2トン(前年比0.50倍)、尻労地区12.4トン(同0.39)、大間地区114.7トン(同1.97)、三厩地区0.03トン(同0.02)、深浦地区9.3トン(同1.99)、岩崎地区0.05トン(同0.02)、八戸地区2.7トン(同1.00)となった。ただし、大間地区の水揚量、前年比は中央市場に出荷されているもののみ(セミドレスの状態で20kg以上)を対象としている。各地区ごとのクロマグロ水揚量の経年変化(1992~1997年)を図2に、八戸をのぞく全調査地区における体重階級(5kg毎)別水揚げ尾数を図3に示した。

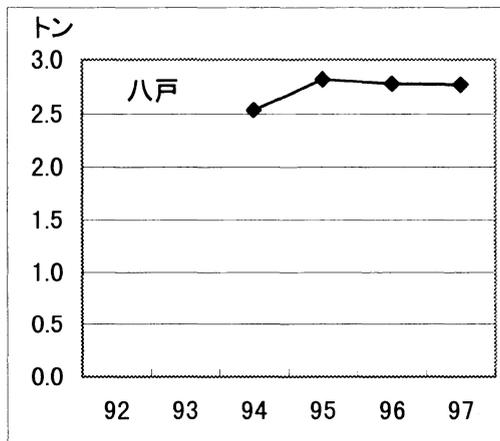
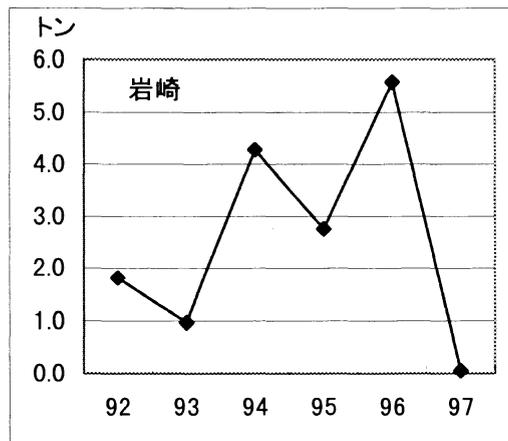
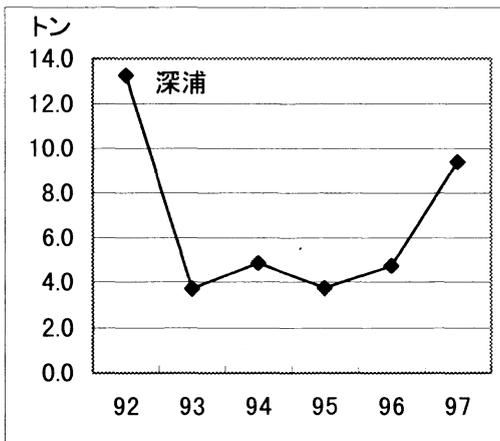
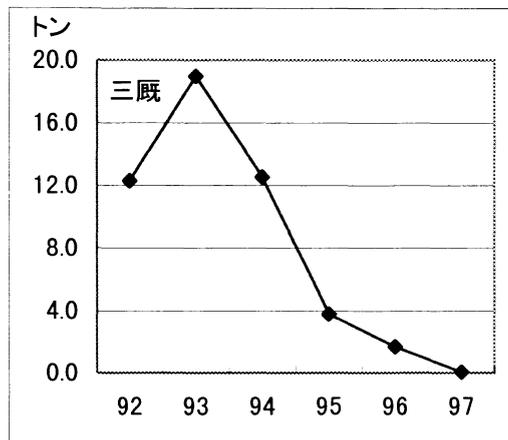
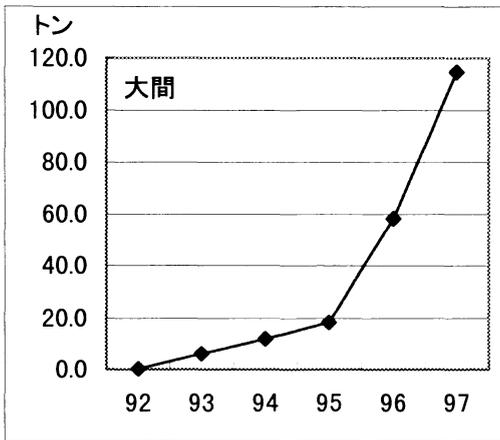
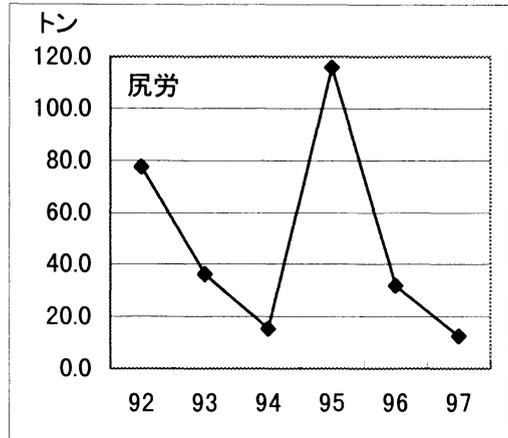
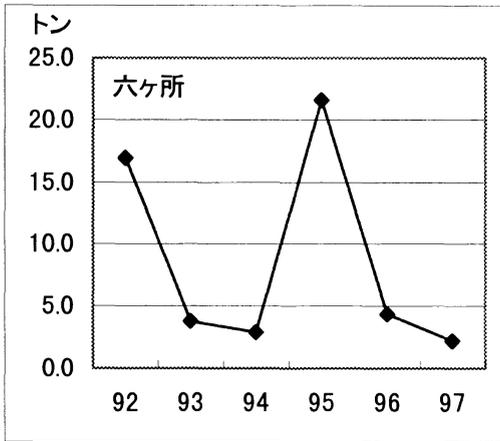


図2 調査対象地域における
クロマグロ水揚量の経年変化

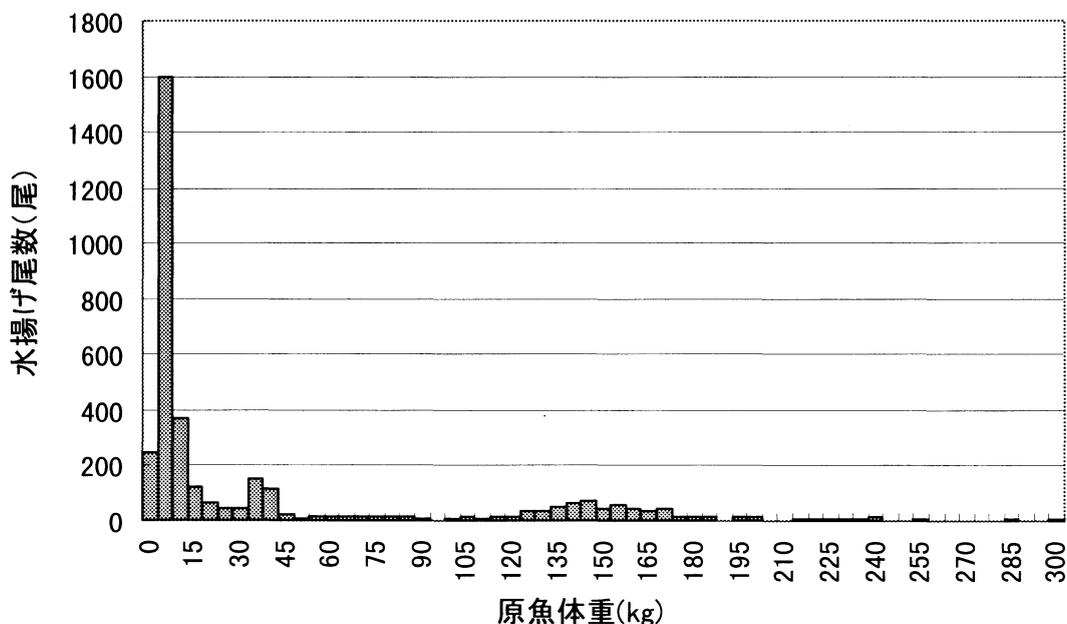


図3 クロマグロ体重別水揚げ尾数 (1997)

考 察

1995年に尻労地区で1万尾以上も水揚げされた1994生まれとみられるメジは、1997年ではかなり減少した。そのため、メジや小型まぐろがクロマグロの水揚げの大部分を占める定置網漁業を行っている地区（六ヶ所、尻労、岩崎）では前年に比べ水揚量が減少していた。深浦地区でも定置網漁業を行っているが、1997年は曳釣による水揚げが大幅に増加したため、前年の水揚量を上回った。この曳釣の漁場は深浦地区沖合にある久六島付近で、時期は10～12月であった。漁業者への聞き取りから、例年と異なりメジの滞在期間が長かったことがわかった。5～8月の北上期に定置網で水揚げされるメジと、南下期である10～12月に曳釣で水揚げされるメジが同一年級群とすると、北上期は沿岸付近を回遊し、南下期はやや沖合を回遊すると考えられる。大間地区で水揚げされる大型まぐろの漁場は津軽海峡でもかなり沖合であることが漁業関係者からの聞き取りでわかった。クロマグロは成長するに当たって回遊経路を沿岸から沖合へ移行していく特徴があるものと推察された。

謝 辞

水揚げデータの収集にあたりご協力いただいた大間町水産課金澤秀人氏、むつ水産事務所普及課中田凱久氏、蛸名政仁氏に、厚く御礼申し上げます。

(さめ類)

はじめに

延縄漁業などでまぐろ類とともに混獲されるさめ類についても、まぐろ類と同様で生態の不明な点が多い。また、まぐろ漁業との混獲実態の把握も兼ねて、本調査ではその基礎資料となる水揚げデータの収集を行った。

調査方法

まぐろ類との混獲が考えられる漁法である延縄漁業、まき網漁業などによる水揚量が多い八戸地区を調査対象地区とした。八戸地区の水揚げデータよりさめ類のデータを抽出し資料とした。

調査結果

1997年の八戸地区におけるさめ類の水揚量は586トンで、前年の1.34倍であった。魚種別では、アブラツノザメが548トン（前年比1.33倍）、ネズミザメ29トン（同1.81）、ホシザメ7トン（同1.06）となった。さめ類の年別水揚量を表1に、主要3魚種の経年変化を図4に示した。

表1 八戸におけるさめ類の年別水揚量 (kg)

1994		1995		1996		1997	
アブラツノザメ	311,275	アブラツノザメ	462,351	アブラツノザメ	411,416	アブラツノザメ	548,964
ネズミザメ	27,928	ネズミザメ	14,889	ネズミザメ	16,032	ネズミザメ	29,128
ホシザメ	2,480	ホシザメ	4,663	ホシザメ	7,262	ホシザメ	7,700
ヨシキリザメ	79	その他サメ	10	ヨシキリザメ		モーロザメ	310
アオザメ	30					ヨシキリザメ	60
						オナガザメ	50
さめ類合計	341,792		481,913		434,710		586,212

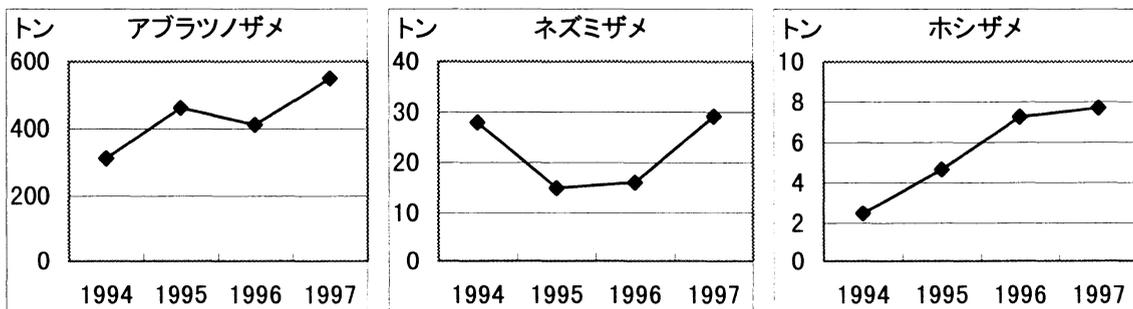


図4 八戸におけるさめ類主要3種水揚量経年変化 (1997年)

考 察

水揚量は少ないが1997年にはモーロザメが水揚げされていた。これは標準和名ではおそらくアオザメだと思われる。アオザメやヨシキリザメはフカヒレの原料として珍重されており、場合によっては操業中船上で解体され、ヒレのみ出荷することもある。そのため、水揚量として市場で記録された数値をそのまま用いることはかなりの誤差を招くおそれがある。現在水産庁では、このような誤差を補正するため、出荷されたヒレ部位から原魚重量を推定する換算式を作成中で、これが完成すればより正確な水揚量が把握できると思われる。